

第4節 小千谷リビングラボ「at！おぢや」

～小千谷市の図書館等複合施設整備事業における試み～

(新潟県小千谷市)

大杉 覚（東京都立大学法学部 教授）

1. はじめに

小千谷市（新潟県）では、旧小千谷総合病院跡地に整備を進めている図書館等複合施設の整備において、施設の整備段階から、市民と行政とが新たな施設の活用方法や地域の価値・課題などをともに考えていく場として、小千谷リビングラボ「at！おぢや」を立ち上げてきた。

本節では、現在進行形である小千谷リビングラボ「at！おぢや」を取り上げ、その導入の背景や目的をまず確認したい。市民参加（参画）や協働の実践例がほとんどない小千谷市でなぜ、リビングラボという新たな手法を導入しようとしたのかは興味深い点である。また、小千谷リビングラボ「at！おぢや」がどのようなタイプのリビングラボであるのか、そのスキームや実際の運営について現時点まででどのような効果がうかがわれるのか、そして、明らかになった課題等があればどのようなものを検討することで、リビングラボの活用を通じた住民協働や共創・協創のあり方を考察したい⁵。

2. リビングラボ導入の背景・目的

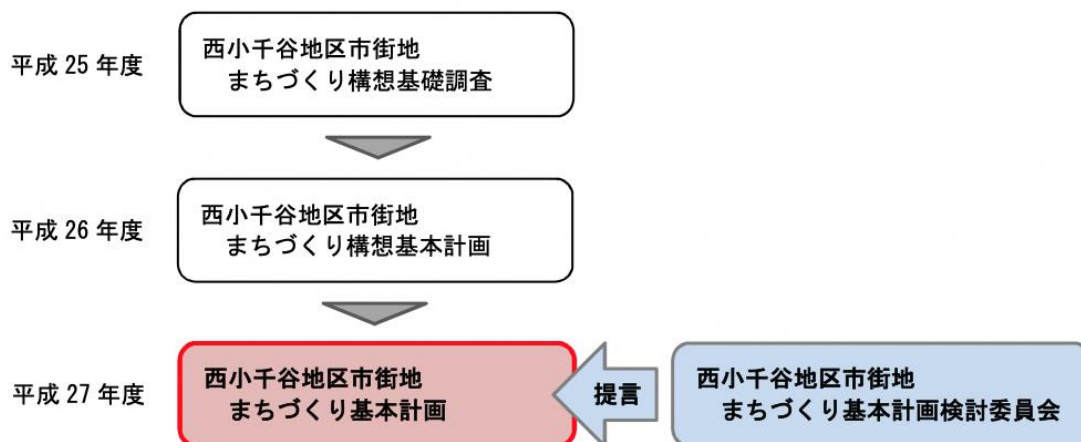
（1）中心市街地活性化と誘導施策としての施設整備事業

小千谷市の中心市街地（西小千谷地区）に立地していた小千谷総合病院の統合移転（2017年4月）にともない、かねてから活力低下が問題となってきた中心市街地への更なる影響が懸念されたことから、小千谷市では、中心市街地活性化策を模索してきた経緯がある。

市人口の減少、高齢化の進展や中心商店街の活力低下の一方で、旧小千谷総合病院付近は公共交通の利便性に優れたエリアであり、市民ニーズ調査の結果からも、多くの人を集め、賑わいや交流が生まれるまちを望む声が強いことから、まちづくりの方向性として、①集客機能の導入に向けた病院跡地の活用、②病院移転に併せた公共交通の機能強化、を打ち出し検討が進められてきた。その結果、「核となる機能を「図書館」とする」、「機能（施設）を複合することにより相乗効果を生み出す」方針等が「西小千谷地区市街地まちづくり基本計画」（平成28年3月）で打ち出されたのである（図表1）。

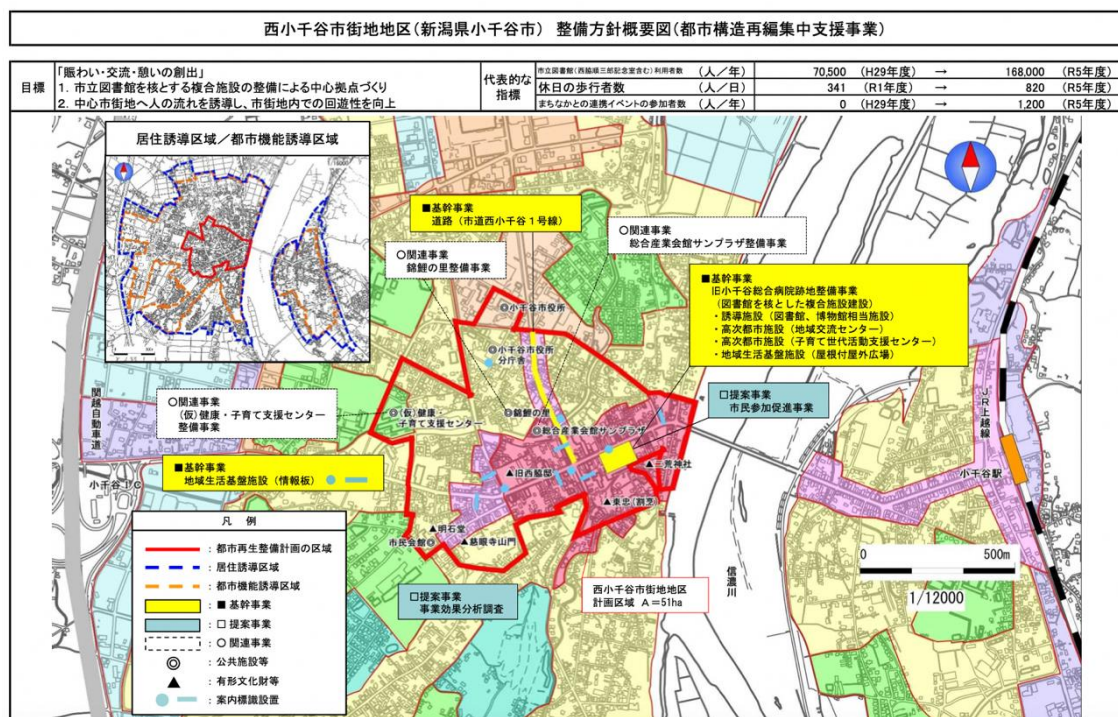
2019年には「都市再生整備計画 西小千谷市街地地区」が策定され、令和元年度から令和5年度にわたる5ヵ年の事業が開始されている⁶（図表2）。

図表 1 小千谷市まちづくり計画の経緯



(出典) 小千谷市「西小千谷地区市街地まちづくり基本計画」(平成 28 年 3 月)、2 頁。

図表 2 小千谷市都市再生整備計画 西小千谷市街地地区整備方針概要図



(出典) 小千谷市「都市再生整備計画 西小千谷市街地地区」(令和 2 年 3 月) <https://www.city.ojiya.niigata.jp/uploaded/attachment/20396.pdf>

（２）施設整備事業における事業手法の見直し

リビングラボが導入された背景には、図書館等複合施設整備事業に関して、当初予定していた PFI 手法による事業スキームが、事業者選定で決定された優先交渉権者が途中辞退したために見直しが図られ、「従来方式をベースに PPP（官民／公民連携）を加えた方式」へと転換されたことが挙げられる。

リビングラボ導入の直接のきっかけは、こうした事業方式の転換後、公民連携支援事業者であるアカデミック・リソース・ガイド（株）から「官民／公民連携をさらに一歩進めて、行政と民間で新しい公共を共に創っていく〈共創〉」が提起され、「リビングラボ」立ち上げの提案が出されたことであった。

事業手法見直し前に策定されていた「小千谷市立図書館及び(仮称)小千谷市立郷土資料館基本計画」（平成 30 年 3 月）には「新図書館建設までの間に市民ワークショップなどを実施し、参加のあり方を市民とともに考えます」と明記されていた。また、PFI 事業者の公募資料「要求水準書」にも設計段階から市民とのワークショップを開催することが条件として示されており、また、事業コンセプトとしても、人と人のつながりから、官民のイコール・パートナーシップの構築を通して新たな価値創造を図る必要性をうたっていた⁷。このように、市民参加・協働の手法を取り入れたいという意向を当初より行政担当者が持っていたことがリビングラボ導入につながったと考えられる。担当者の間では、リビングラボの提案が提起されたこと自体は「目指す方向性は全く相違ないものとして受け止め」られたという。

ただし、リビングラボのほかに、新たな事業手法では「リ・デザイン」というキー・ワードも掲げられており、これらのことばに対して「わかりづらい」という受けとめ方が庁内・議会・市民の間にあったようである。しかしながら、むしろそのわかりづらさが逆に「キャッチフレイズ的に“フック”になった」と担当者は考えたという。

実際、キックオフとして開催されたシンポジウム「市民参加プラットフォームを育てるためのシンポジウム まちと公共施設の未来を創造する」（2020 年 12 月 6 日開催）に 100 名近くの集客を得たことが一つの転機となった。また、参加者だけではなく参加できなかった住民向けにも積極的に情報発信を行い、地元紙などで好意的な記事で毎回取り上げてもらえたことなどから、リビングラボについて徐々に認識が深まり、取り組みが評価されるようになったという。

なお、「旧小千谷総合病院跡地整備計画」（平成 29 年 6 月）で示された「賑わい・交流・憩いの創出」といった基本理念、「小千谷市立図書館及び（仮称）小千谷市立郷土資料館基本計画」（平成 30 年 3 月）で示された基本理念・方針は踏襲された一方で、新型コロナウイルス感染拡大にともなう社会状況の変化や「新しい生活様式」への対応等も踏まえて、PFI 事業者の公募資料「要求水準

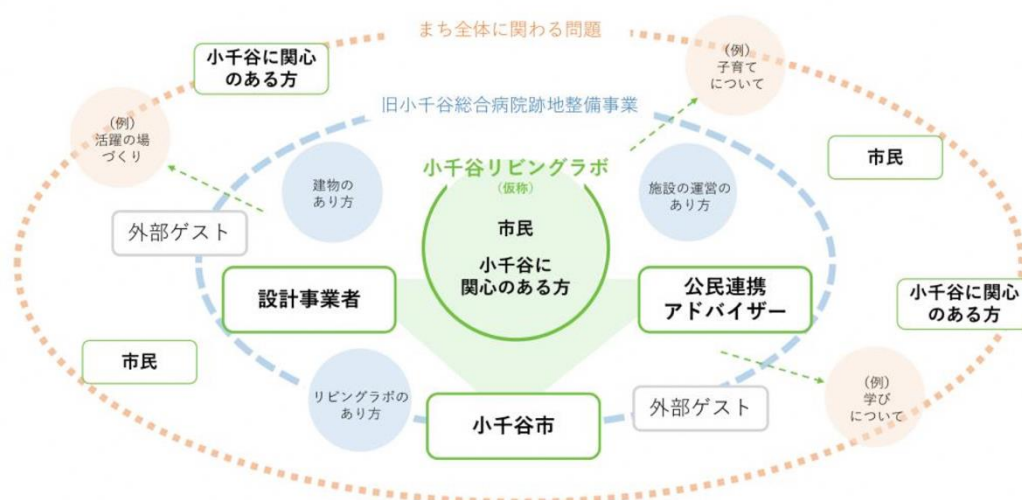
書」に示された「施設全体の整備方針」を基本としつつ、施設構成・規模及び施設の基本機能等について見直しが図られて事業が進められることになったという⁸。

こうした再検証のプロセスで特筆すべきは、「まちづくり、施設づくりと運営の主体は「人」であることに改めて真摯に向き合い、市民の視点からまち、公共サービスを問い直すため」に、①市民グループインタビュー、②フィールドワーク、③オンライン視察研修(須賀川市民交流センターtette、紫波町図書館／オガールプロジェクト)、といった調査・研修を行ってきたことである。

3. 「at! おぢや」のスキームと運営

小千谷リビングラボの特徴は、〈共創〉のための対話を重視する考え方から、図に示されるように、市民を主体としつつ、小千谷市や図書館等複合施設整備事業の設計事業者の他に、公民連携アドバイザーが重要な役割を果たすかたちで、構成されている点である。この点は、当初の PFI 優先交渉権者の辞退にともなう決定取消（2020 年 3 月）ののち、速やかに官民連携支援業務の受託者（アカデミック・リソース・ガイド㈱。以下、arg）が決定され（同年 7 月）、それが施設設計業務のプロポーザル（同年 12 月）や受託者決定（2021 年 4 月）よりも先立って行われたことからわかる。arg は、「at! おぢや」スタート前の先述の市民グループインタビュー、フィールドワーク、オンライン視察研修の実施などを含む事業手法の再検討から設計事業者選定までの支援、そして「at! おぢや」の立ち上げや事業推進で重要な役割を果たしてきている。

図表 3 小千谷リビングラボ（仮称）のイメージ



（出典）小千谷市「第 1 回小千谷リビングラボ（仮称）結果報告」より

2022 年 12 月段階で、「at！おぢや」は 11 回開催されている（第 1 回は 2021 年 3 月 21 日）。概ね 50～80 人ほどの参加者を得ている。なお、小千谷市では、先述のとおり情報公開が徹底されており、図書館等複合施設整備事業や小千谷リビングラボ「at！おぢや」に関する情報はホームページ上で知ることができる。とくに毎回の結果報告書が詳細にまとめられている。

定例会のほかに、先述のプレイベントであるシンポジウム、小千谷リビングラボの愛称である「at！おぢや」を決定した愛称市民投票、中学校や市内子育てサークルへの「出張 at！おぢや」、新潟工科大学との連携プログラムなどが開催されてきた実績がある。こうした取り組みから、学生の参加が増えてきており、また、市外からの参加者も少なくないようである。

いずれも対話を重視したワークショップ形式によっている。

図表 4 「at！おぢや」の開催状況

	参加人数	主な内容（開催報告による）
プレイベント：市民参加プラットフォームを育てるためのシンポジウム「まちと公共施設の未来を創造する」（2020 年 12 月 6 日）		第 1 部 事業概要の説明 第 2 部 ゲストレクチャー テーマ 1 図書館 手塚美希（紫波町図書館主任司書） テーマ 2 地域づくりと市民協働 三矢勝司（NPO 法人岡崎まち育てセンターりた事業推進マネジャー） テーマ 3 子どもの未来 阿部ふく子（新潟大学人文学部人文学科准教授） 第 3 部 パネルディスカッション 手塚美希、三矢勝司、阿部ふく子、澤田雅浩（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科准教授）、平賀研也（前県立長野図書館館長）
第 1 回（2021 年 3 月 21 日）	73 名	中心市街地の活性化を目的として、本町一丁目の旧小千谷総合病院跡地に図書館等複合施設の整備を進めている。施設の整備段階から、新しい施設の活用方法や地域の価値・課題などについて、市民と行政が共に考えていく場として「小千谷リビングラボ」（仮称）を立ち上げ、オープン後の施設の活用につなげていく。

小千谷リビングラボ 愛称市民投票 (2021年4月9日 ～5月6日)		読み方：あっとおちや 意味：「at」（アット）には、一点に集まるという 意味があり、みんなが一つの場所に集まって話 し合いができる場を意味する。
第2回 (2021年5月8日)	77名	公募により決まった設計者の株式会社平田晃久 建築設計事務所(東京都)も加わり、提案内容につ いてご説明いただきながら、そこから想像する 利用のイメージなどについて考える。
第3回 (2021年6月19日)	72名	前回行ったグループワークなどをもとに作成さ れた新しい図書館等複合施設の3つの設計提案 について、設計者である(株)平田晃久建築設計事 務所から模型を使ってご説明いただきながら、 体験パターンをみんなでマッピングするグルー プワークを行った。
第4回 (2021年7月22日)	71名	午前は、市民が広く深く共感できる屋根(ルーフ) をデザインするにあたって、市民が自己投影で きる「きっかけ」となる思い出深い場所、土地を 知るグループワークを行った。午後は、各グルー プに割りあてられたアンカーがどんな役割を持 つものかを確認し、その内部や周辺環境・他のア ンカーとの関係性、そこから生まれる活動につ いて書き出すグループワークを行った。
第5回 (2021年10月10日)	83名	これまでの at!おちやでの検討を踏まえてまと めた基本設計について、設計者である平田晃久 建築設計事務所(東京都)が説明を行った。その後 のプログラムでは、「あそび」というテーマでペ アワーク+グループワークを行った。
第6回 (2021年12月18日)	78名	11月に公表した基本設計について、コスト削減 のため一部内容変更し実施設計を行っているこ との報告を行った。その後のワークショップで は、施設オープン後の運営をより意識した形で、 施設内でのプログラム(使い方や過ごし方)を考 えることをアンカンファレンス形式で行った。
第7回 (2022年2月12日)	オンラ イン開 催	今回は新型コロナウイルス感染症拡大状況を踏 まえ、急遽オンラインでの開催となりましたが、 ここまでのワークショップ形式での開催ではじ

		つくり共有する機会のなかった、この事業に関わっている本市担当者や協働事業者がここまでの経緯のなかで重きを置いていること、試行しながら考えていることを共有する機会にしたいと思います。
第 8 回 (2022 年 5 月 22 日)	70 名	設計者の(株)平田晃久建築設計事務所(東京都)からの実施内容の共有、後半のワークでは、ここまで実施してきたことを運営側・参加者側も含めてともに振り返り、もっと at!おぢやをよりよくしていくために一緒に考える対話と、新潟工科大生(柏崎市)との連携プログラムを具体化するための作戦会議を行いました。
第 9 回 (2022 年 7 月 27 日)	59 名	設計者の(株)平田晃久建築設計事務所(東京都)からの最終的な設計内容の共有や、小千谷リビングラボ「at! おぢや」の位置づけとこれまでを振り返ったのち、ゲスト 萩原修さん(つくし文具店(東京都国分寺市)店主、プロジェクトデザイナー)をお招きして「集まり動かす、地域にひらく」というテーマでお話を伺いました。お話の後には、参加者のみなさんと「プロジェクトの名前を決める」ミニワークショップを行いました。
第 10 回 (2022 年 10 月 2 日)	46 名	施設内の様々な活動を行うことができる空間「アンカー」のうち、「食アンカー」(カフェ機能)と、「発+作アンカー」(デジタルものづくり工房)について、その概要をご紹介したのち、それぞれ関心のあるアンカーの具体的な活用を、プロジェクト(イベント)の企画書として考えるワークショップを行いました。
第 11 回 (2022 年 12 月 4 日)	52 名	「和+会」アンカー(和の雰囲気that漂う多目的空間)、「展」アンカー(郷土資料館・展示室)、「趣」アンカー(屋上に立地するアナログ工作等のできる多目的空間)の活用について考えよう!

(注) 小千谷市ホームページ

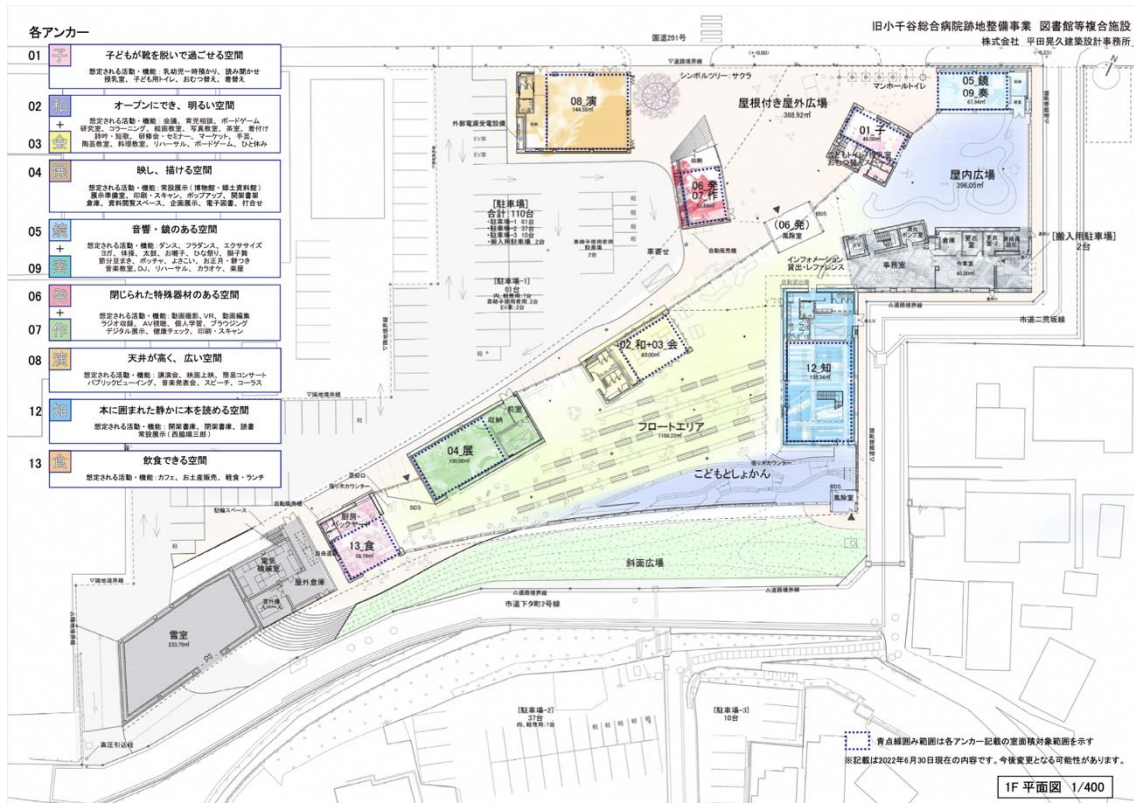
<https://www.city.ojiya.niigata.jp/soshiki/kensetsu/livinglab.html> より作成。

図書館等複合施設整備事業の設計者は、太田市美術館図書館などを手がけた株式会社平田晃久建築設計事務所である。建物の特徴としては、①変化し続ける「小千谷のこと」と連続する動的な建物、②実空間と情報空間の融合、③再生可能エネルギーの導入が挙げられている⁹。

①については、「動く書架や展示台により、資料と資料の新しい関係性を生み出す動的な資料空間（フロート）、その時々に応じて使われ方が変化する活動の場（アンカー）、夏の太陽を遮り、冬の風雪をしのぐ大きな屋根（ルーフ）は、イベントの場ともなり、四季折々の小千谷の「こと」を体験することができます」とあるように、きわめてユニークな設計思想によっている。こうした設計思想を具体化し、どのように利活用していくのかを、「at！おぢや」での市民の対話によるワークショップを通じて検討されてきている。

なお、②実空間と情報空間の融合に関しては、新しい情報環境のあり方を実装することで、地域格差や環境格差等を解消し、情報や知識への多様なアクセスを保障し、新たなコミュニケーションの可能性を広げる」ことを目指しており、情報環境の実装・運用に関する意見やアイデアを受け付けるとともに、対話による調査（「図書館等複合施設 情報環境実装に係るサウンディング型市場調査」）が重ねられている¹⁰。このように、「at！おぢや」にとどまらず、施設整備の過程で、対話重視の姿勢が随所に多角的に採用されている点は注目されるべきだろう。

図表5 「図書館等複合施設実施設計（平面図）」（1階部分）



（注）小千谷市ホームページ「図書館等複合施設実施設計（平面図）」
<https://www.city.ojiya.niigata.jp/uploaded/attachment/28133.pdf> より。

4. おわりに：「at！おぢや」にみるリビングラボの効用

「at！おぢや」は、自治体が主体となって推進する市民参加・協働型のリビングラボの典型的な事例だといえる。これまで市民参加が根付いていなかった小千谷市で、あえて「フック」のあるリビングラボという手法を導入し、対話を重視したワークショップ形式でそのプロセスを組み立てることで、多様な市民の関心を引き起こしてきた。まずもって、担当者レベルにはじまり、市の方針として、対話重視の姿勢が貫徹している点が肝要である。

また、このプロセスでの市民の関わりは、施設完成後には利用者として関わり続けるとともに、ともに創り上げた空間の運営上の協力者としての関わりにつながる可能性があるといえる。

リビングラボ導入にあたっては、須賀川市民交流センターtetteや紫波町図書館・オガールプロジェクトといった先行事例を具体的に観察・分析するとともに、その他の図書館等の事例についても広範に情報収集している。それら情報調達とともに運営ノウハウについて、「at！おぢや」の運営をサポートする委託業者（arg）との密接な連携に基礎づけられている点は注目される点である。

施設そのものが新規な設計思想に基づく建築物（プロダクト・イノベーション）である以上に、他の先行事例をベースにしつつも小千谷市ならではの丁寧な工夫を凝らした取り組み（プロセス・イノベーション）をリビングラボに取り込むことで、ユーザー目線での施設運営への目配りといった成果（アウトカム）やその先のソーシャル・キャピタルの醸成にまで及ぶ展開であることは評価すべき点だと考えられる。

図書館等複合施設整備事業は現在進行形であり、最終的には中心市街地活性化などまちづくりの計画等と接続され、まちづくり総体として、その最終アウトカムの評価を待たなければならない。コロナ禍や不安定さを増す経済情勢といった厳しい環境のなかで、「at！おぢや」を原動力とした事業の進展が期待される。

⁵ 本事例に関しては、第 10 回小千谷リビングラボ「at！おぢや」を現地で観察するとともに（2022 年 10 月 2 日）、改めて小千谷市役所にヒアリング調査を行った（11 月 1 日）。市役所担当者である、田中健建設課都市整備室長、土田昌史主幹にはインタビュー調査等を通じて知見をいただいたことを感謝申し上げたい。また、現地での「at！おぢや」視察の際には、アカデミック・リソース・ガイド㈱のスタッフを含め多くの参加者の方々からもご教示をいただいたことをお礼申し上げたい。

⁶ なお、小千谷市によれば、2022 年 12 月現在、計画内容を一部変更し、令和 6 年度までの 6 カ年の事業とすることで国と協議中である。

⁷ 担当職員の一人に市民会館勤務の経験があり、普段はほとんど活用されず若者の姿が見られなかったが、イベントなど色々仕掛けてみると若者をはじめ関わりを持つ人も多いことから、日常的に子供からお年寄りまで誰でも関わりを持ってもらえるような場にするために、行政情報や事業プロセスをオープンにしたいと考えていたという。また、隣接する十日町市でかつて行われた市民ワークショップ形式での「まちなかステージづくり」の取り組みに影響を受けたという。

⁸ 小千谷市「旧小千谷総合病院跡地整備事業 事業方針」（令和 2 年 12 月）、1 頁。

⁹ 小千谷市ホームページ <https://www.city.ojiya.niigata.jp/soshiki/kensetsu/atochi-1-1.html>。

¹⁰ 小千谷市ホームページ <https://www.city.ojiya.niigata.jp/soshiki/kensetsu/jyoho-sounding.html>。なお、サウンディング型市場調査の結果については、小千谷市建設課都市整備室「結果概要」（令和 4 年 12 月 27 日）

<https://www.city.ojiya.niigata.jp/uploaded/attachment/29451.pdf> 参照。なお、「図書館等複合施設内のカフェの運営等に係るサウンディング型市場調査」も行われ、結果が公表されている。<https://www.city.ojiya.niigata.jp/soshiki/kensetsu/tosyo-sounding.html>。